

ブルデューの認識論と実践理論の再考
——技能・実践共同体・組織をキーワードにして——

小 松 秀 雄

Summary

Study of Bourdieu's Epistemology and Theory of Practice

—According to the keywords of Skill, Community of Practice, Organization—

Hideo Komatsu

A great number of the papers on skill, community of practice, and situational approach to learning have been published in recent years. In this paper, to begin with, I consider Henry Mintzberg's theory of organization, a general theory of expertise, Kazuo Koike's theory of intellectual skill. That these theories have 'structural similarity' will be made clear. And then, I intend to investigate the situational approach to learning and concept of community of practice while I take up the literatures such as "Situating Learning" and "Communities of Practice". According to these considerations I re-examine both critically and constructively on the work of France's foremost living sociologist, Pierre Bourdieu.

In sociology Bourdieu has energetically attempted to construct the theory of practice that is relevant to the subject of skill, community of practice, situated learning. Bourdieu has developed one of the most powerful and heuristically promising perspectives which does integrate the practical logic of everyday action and the objective structures. In order to understand the practical logic Bourdieu has attempted to move beyond objectivism and subjectivism and to grasp the interaction of structures and practices in the conduct of everyday life, by means of the concepts of habitus, symbolic capital, the body and so on. Moreover, "Le métier de sociologue (The Craft of Sociology)" which Bourdieu published in collaboration with Chambord, Passeron in 1968 provided a new perspective on the skill of sociologist and the method of sociology.

はじめに

近年、人文社会科学では身体技法、技能、実践、実践共同体、状況に埋め込まれた学習などをテーマにした研究が目を引くようになってきた。現実の社会領域において注目されているNPO現象と関連する学問の動向のように考えられるが、社会学においてはピエール・ブルデューが1960年代から実践理論や「社会学の社会学」(反省的社会学)を精力的に構築してきている。ブルデュー社会学に関しては日本でもすでにかなり議論されており、紹介と概説の段階を超えて応用と批判的再構成の段階へと移行しつつあるから、改めてブルデュー社会学の概論を展開しても余り意味がない。本稿では、技能と実践共同体という概念からブルデュー社会学を解説するために、まず人文社会科学における技能論と実践共同体論のいくつかの学説を考察してみる。次に、それらの学説を参照しながらブルデューの実践理論と社会学的認識論を再検討したい。なお、社会学以外の人文社会科学の多様な言説を次々と検討していくが、主に技能(skill)、実践共同体(community of practice)、組織(organization)という3つの概念をキーワードにして分散しがちな論述の糸を紡いでいくつもりである。

1. 技能をめぐる——いくつかの学説の再検討——

筆者は社会学を専門とするが、技能に関して本章で取り上げる学説はヘンリー・ミンツバーグの経営組織論、小池和男の労働と組織の経済学、ヒューバート・ドレイファスの人工知能批判論、熟達化の認知心理学的研究である。あえて自分の専門領域とは異なる学説を取り上げるのは、社会学的枠組みの中に異分野の学説の優れた発想を取り入れ、技能と実践共同体に関して社会学的に研究する足場をより強固なものにするためである。4つの学説には、技能の問題を考えようと試みる社会学から見て重要な洞察と指摘が数多く含まれているように思われる。

まず一人目のヘンリー・ミンツバーグは現在、カナダのモントリオールのマギル大学経営学部教授であり、経営管理や組織に関する数多くの著書と論文を生産しており、『マネジャーの仕事』『人間感覚のマネジメント』などが日本語に訳されている。1960年代までのアメリカの経済成長を支え、正当化してきた従来の科学的管理法や意思決定学説を批判して、観察や経験を重視した組織論と経営学説を提唱した。彼の重厚な組織論は「コンフィギュレーションに関する力と形の統合五角形」(A System of Forces and Forms in Organizations)の図式に集約されるが、次の第2章において改めて論述することにして、ここでは、数学的手法をベースとする経営科学に対して「行き過ぎた合理主義」であると抗議しながら、経験を積んだ経営者の直観(intuition)を信頼すべき資質として高く評価していることを指摘しておきたい⁽¹⁾。ミンツバーグは、数人の経営者あるいは管理者の日々の行動を詳しく観察して、マネジャーの仕事の次のような役割群(role-set)に整理した。対人関係の役割(フィギュアヘッド・リーダー・リエゾン)、情報関係の役割(モニター・周知伝達役・スポークスマン)、意思決定の役割(企業家・障害処理者・資源配分者・交渉者)(『マネジャーの仕事』第4章を参照のこと)。従来

の科学的経営学の教科書に登場する理論上の経営者とは異なり、現実の経営者は日々、多種多様な仕事を自分の経験に基づいて次々とこなしている。ミンツバーグ自身も多忙なマネジャーのように、このような経営者論と組織論とを結びつけて多産的な研究を続けている。

ミンツバーグは、著書や論文の中でアメリカ的経営科学と対比させつつ、繰り返し日本の経営者と組織を引き合いに出し、高く評価する。2人目の学者は、日本企業の経営システムと人材形成の問題に関して、知的熟練理論という独自の視点から探求し続けている小池和男である。『日本の熟練』『仕事の経済学』『日本の雇用システム』『人材形成の国際比較』『日本企業の人材形成』などの研究成果により、小池の学説は批判されている点もあるが、高い評価を得ている。ミンツバーグのような体系的な組織論はないのに対し、企業組織における技能形成方式に関する精緻な理論（ミンツバーグには欠けている理論）がある。知的熟練 (intellectual skill) とは、問題と変化をこなすノウハウ (know-how) であり、はば広く深い OJT (On-the-Job-Training 企業内の仕事を通じての訓練) と短い OffJT (仕事を離れての訓練) に基づいて養成される。知的熟練に関して注目すべき点は、いつもと同じ作業を繰り返す能力ではなく、むしろ新たな問題を解決したり変化に対応したりする能力こそが核となっている、それゆえに創造性や柔軟性を含んでいる熟練であるということである。小池によれば、国際比較の視点から見ると、知的熟練形成の促進策（技量向上をうながす手法）として優れているのは日本的な雇用システムであるという。それは、固有の資格制度と報酬制度と昇進制度が統合された雇用システムであるけれども、1990年代の経済停滞にあえぐ日本経済を目の当たりにすると、小池の学説を疑いたくなるかもしれない⁽²⁾。だが、定期的なローテーション方式でほとんどの従業員が企業内のいろいろな職場の仕事を体験し（幅広い OJT）、しかも技能向上を評価する仕事表と技能資格への昇格基準表に基づいて技能と報酬を査定されながら（深い OJT）、技能を向上させていく方式は、一企業にとどまらず一国全体のビジネスマンや職業人の能力を総体的に高めていく優れた方式であろう。国際的な比較研究の結果を見ても、日本と類似した熟練形成方式と報酬制度と昇進制度を採用している国は、アメリカをはじめとして少なくない。日本の場合には、他の国に比べ、文字通り「より深く幅広く」企業社会全体に広がっている。内部労働市場に頼らずに、外部労働市場から各企業にとって必要な技能を持つ人材が十分に確保されるようになるためには、技能養成の機関を社会的に整備しなければならない。言い換えれば、それぞれの企業が負担してきた人材養成の費用を、社会全体または国民一人一人が引き受けなければならないだろう。

小池の知的熟練理論と共通する視点と発想を持つのが、ヒューバート・ドレイファスの人工知能批判論（認知科学）である。ドレイファスは、アメリカのマサチューセッツ工科大学で哲学を担当していた1960年代から80年代にかけて、人工知能開発プロジェクトを一貫して批判してきた。1986年に刊行された『Mind Over Machine: The Power of Human Intuition and Expertise in the Era of the Computer』（日本語訳『純粹人工知能批判』1987年）において、ドレイファスは、人工的に作られた、どんなに高度な機械であっても、人間の直観やエキスパートの技能に代置することはできないと繰り返し主張した。彼によれば、コンピュータ・プログ

ラムの高速で複雑な計算的推論とは異なる、人間に固有の能力は、認知し統合し直観する能力であり、この能力のおかげで人間は、日常生活において直観的に状況を理解し、適切に対処できる。人間の柔軟な対応力を技能と考えれば、一般に試行錯誤を通じて人間は技能を獲得していく、言い換えれば技能を向上させていく。技能を獲得する（向上させる）につれて、課題の理解の仕方や意思決定の方法や解決の方法が五つの段階（初心者・中級者・上級者・プロ・エキスパート）を経て質的に変化していく。要するに、初心者からエキスパートまでが技能獲得（向上）の段階であり、初心者の段階では規則を覚えることと状況を理解することに懸命になり、余裕を持って柔軟に状況に対応できるわけではない。現実の経験の中で失敗と成功を繰り返しながら、規則と状況と行動の記憶が蓄積されると、以前の経験に照らして状況を素早く理解し臨機応変に対応できるようになる。ドレイファスは、看護婦、医師、チェス、パイロット、ドライバーなどの事例を使って初心者の段階からエキスパートの段階までの特徴を解明している。計算的推論に頼る機械には、人間のような試行錯誤と技能獲得（向上）のプロセスが欠落しており、そのために経験に裏打ちされた直観やコツを中核とする柔軟な対応力を養成できない。もちろん、直観やコツといっても、神秘的な靈感や先天的な能力のようなものではなく、あくまでも経験と記憶の積み重ねを通じて養成される「全体観的類似性認知能力」（*holistic similarity recognition*）が核となっている知的で合理的な能力である。数学的モデルや科学的意思決定分析を特徴づけるのが計算的合理性であるとすれば、直観やコツを中核とする合理性は熟慮的合理性（*deliberative rationality*）である⁽³⁾。詳細は省くが、X線写真を素早く、正確に解読する、熟練した医師の事例が参考になる。数えきれない、多様なX線写真を診断してきたエキスパートの医師は、蓄積された写真と診断の記憶から類似したパターンを素早く引き出し、目の前の写真を適切な仕方で解読できるだろう。

4番目の熟達化（*expertise*）の認知心理学的研究は、ドレイファスの言説と関連が深いので詳細は省くが、手際のよい熟達者（定型的熟達者）（*routine expert*）と適応的熟達者（*adaptive expert*）の区別の問題を中心に考えてみたい。手際のよい熟達者とは、算盤や記憶術の達人のように「同じ手続きを何百回、何千回と繰り返すことによって習熟し、その技能の遂行の速さと正確さが際だって優れている人」であり、適応的熟達者とは、優れた芸術家や学者やスポーツマンのように「手続きの遂行を通して概念的知識を構成してきたため、課題状況の変化に柔軟に対応して適切な解を導くことのできる人」である⁽⁴⁾。熟達化の2つのタイプを分けるポイントは、下位技能の習熟と問題解決に必要な既成の知識の習得とを超えて、「遂行と自己状態に関する適切な評価基準」を獲得できるかどうかである。もちろん、後者の適切な評価基準も身体化されるようになり、熟達化が進めばすべてではないにせよ言語表現可能な部分が徐々に拡大するだろう。定型的熟達から適応的熟達へとステップアップすれば、課題や状況の変化に合わせて技能を適切に行使できるとともに、新しいやり方で課題を解決できるようになるだろう。それでは、熟達を促す工夫にはどんなものがあるのか。この問題は、実践共同体論に関連するので詳細は次章に譲るとして、ここでは能動的モニタリングをともなった学習、ならびに意味ある文脈のなかでの学習と呼ばれる2つの工夫を指摘しておく⁽⁵⁾。前者のケースで

は、作品発表会や試合などの重要な試練に自分を立たせ、半ば強制的にモニタリングせざるを得ないように仕向け、評価基準の体得を進める。後者のケースでは、熟達先輩と一緒に行動する過程で「その場の状況と先輩の行為に埋め込まれている知識や身体技法」を体得する。

以上の4つの学説以外にも、近年多種多様な技能研究の成果、あるいは現場の職人たちの技能習得のライフストーリーのモノグラフが刊行され、人間の技能の現実が次第に明らかになってきたけれども、紙幅の都合上、それらの研究資料に関する考察は割愛したい⁽⁶⁾。ただ、注目すべき点を若干指摘しておく、森和夫は、職業能力開発大学校における多種多様な専攻の学生たちが講義と実習の中で関連技能を習得していく過程を時系列的に調査して、〈技能習熟における能力の構造化〉仮説を提示している。この仮説は、ドレイファスの技能獲得の五段階説や熟達化の認知心理学的言説と見事なまでに照応している。講義と実習のグレードに対応する個別の作業と対象に関与する複数の下位技能が順次習得される一方で、それらの下位技能を統合する認知枠組みが理解されるにつれて、自己と対象世界との関係を適切に評価できるようになる。このように、本稿で取り上げた4つの技能論によって多種多様な技能研究のかなりの言説が統合できるものと思われる。

また、技能論は学習とともに記憶の問題を抱えているので、記憶の科学的言説の角度からアプローチすると技能に関して有意義な知見が得られるかもしれない。ただ、日夜実験を積み重ねて仮説の証明を試みている記憶研究の専門家の実践的専門知識を前にして、筆者のような門外漢が短期間少しばかり記憶研究の書物を読んだ程度のレベルで、あれこれと不確かなことを述べることは慎まなければならないから、技能と記憶の関連について参考になった言説を挙げるにとどめたい。エンデル・タルヴィング Endel Tulving の「人間の複数記憶システム」における手続き記憶 (procedural memory) の仮説が、技能の身体化を考える際に参考になった (『科学』 Vol. 61, No. 4, 263-270ページ, 1991年4月)。タルヴィングの仮説が記憶研究の中でどのような評価を与えられ、今後いかなる可能性を持ちうるかに関しては、コメントを差し控えなければならないけれども、意識の表層から深層に向かってエピソード記憶、一次記憶、意味記憶、知覚表象システム、手続き記憶という記憶システムの階層が存在しており、最後の手続き記憶は行動的あるいは認知的技能の獲得に働く記憶であり、潜在記憶であり長期記憶である。技能の自覚されない身体的基盤に関する知見が複数記憶システム論には含まれている。たとえば社会学の立場からであれ技能の問題を考察しようとするとき、技能の多種多様性という幅の広さと同時に、人間の身体が持つ奥の深さを痛感する。

2. 実践共同体と組織

第1章において技能論のいくつかの言説を考察してみたが、どんな技能であれ個人が技能を習得するとはいうけれども、個人が孤立して学習する現象として、あるいは個人的天才による秘技の会得のごとく神秘化して技能習得を捉えてはならない。学習や熟達は社会的に開かれた過程であり、また技能も社会的な学習過程を基盤として成り立つ文化現象である。ただし、近代の学校教育や伝統的徒弟制訓練が陥りやすい弊害として批判されているように、個人を丸ごと

と既成の鑄型と構造に包摂していく「強制された教育＝訓練」として技能習得を捉えることも一面的である。そこで最初に、近年注目されている実践共同体論に焦点を当てて、「技能の社会的開放性と過程性」を考えてみる。それに引き続いて、組織という社会的コンテクストの視点から、技能と実践共同体を再検討してみたい。

(1) 実践共同体に関する言説

1980年代から認知科学を中心に、教育に関する状況論的アプローチの研究と熟達化の研究が進んでいる。とりわけ、実践共同体への正統的周辺参加(Legitimate Peripheral Participation: LPP)を通じて「実践の認知的所産としての技能」を高めていくという枠組みは、本稿にとって重要な知見を与える。正統的周辺参加は、文字通り共同体(組織)の中におけるいろいろな役割の実践を通じて、技能と認知のレベルを高めていくプロセスを把握する概念であり、第1章における技能論の議論と接合できる。実践共同体という用語は、ジーン・レイブ&エティエンヌ・ウェンガー『状況に埋め込まれた学習』(Situated Learning, 1991.)において初めて学術上の専門概念として使われた。この状況論的学習論、ないしは状況論的アプローチはいろいろな分野で応用されながら展開されているが、その中でウェンガーは実践共同体論というテーマで状況論的学習論を最も精力的に発展させている。ここでは、ウェンガーの最近の文献を参考にして実践共同体について理論的に素描してみる⁽⁷⁾。

まずウェンガーによれば、人間として生きるとは、物理的な生存を維持することから最高の楽しみを求めることまで、あらゆる種類の企図や事業に絶え間なく複数の人間と共に参画することを意味する。そのとき、われわれはお互いに相互作用し、世界と関わり、お互いの関係を調整し、それに応じて世界との関係を調整する、すなわち共に参加しつつ学習する。このような集合的学習は、企図や事業の追求とそれに伴う社会関係を反映する実践の中に現れる。そして、それらの学習＝実践は、共同の企図や事業の追求の過程で創造される共同体の属性である。ある歴史的社会的コンテクストにおいて人間として生きることが実践であり、形態や内容や程度の差こそあれ、他者や世界との相互作用、共同体の生成、および学習というプロセスを含んでいる。ウェンガーは「人間が生きること」の原点から実践共同体論を展開しようと試みていると言えるかもしれない。何となくジャン・ジャック・ルソーの教育思想や社会契約論に代表されるような、古き良きユートピア思想の香りがしないでもないが、もう少し現代社会論的展開を追いかけていこう。

ウェンガーは実践共同体に関して次のように述べている。実践共同体はどこにでも存在しており、われわれは職場で、学校で、家庭で、趣味の場で多くの実践共同体に参加している。ただ、実践共同体は通常組織や利害集団や地域共同体とも異なり、名前のあるものもあるし、ないものもあり、またわれわれは共同体の中核的なメンバーであることもあれば、周辺的に参加していることもある。実践共同体は、予め決められた指令や規則に則って組織されるわけではなく、人々にとって問題となる状況において生成し発展する。共同体の実践は、参加メンバーが重要であると理解した事柄を反映し、メンバー自身の理解に基づいて発展する。実践共同体は基本的には自己組織システムであり、メンバー間の異なるレベルの相互作用と活動によって

特徴づけられる発展段階 (Potential→Active→Dispersed→Memorable Stages) を動いていく。それでは、組織などの社会形象と実践共同体とはどのように関連し合うのだろうか。実践共同体はどんな組織においても存在するけれども、共同体のメンバーシップは規則や地位＝役割ではなく参加に基づき、資格や制度的加入によっては束縛されないため、組織の制度的構造やヒエラルキーという枠組みを超える。実践共同体は新しい種類の組織単位ではなく、組織構造の新しい切り口であり、そこに参加する人々が共に学習する、共に作業する、お互いに知り合いであるようなダイナミックな社会構成過程である。人々は、ビジネスの機能的単位において下位組織に所属し、チームにおいて割り当てられた特定の事業に専念し、ネットワークにおいて社会関係を形成する。そのとき、同時に実践共同体という形で自らいろいろな課題を認知しつつ実行するために、技能を学習しながら発展させるようになる。「共有された実践としての共同体」のインフォーマルな編み物が、公的組織を効果的なものにするだろう。

近年のウェンガーの言説をベースにして論述してきたが、紙幅の都合上、実践共同体論に関連する重要な議論と評価を二三取り上げて次のテーマに移ることにしよう。ウェンガーがレイブとの共著『状況に埋め込まれた学習』において提唱した正統的周辺参加論は、状況論的学習アプローチに立脚した実践共同体論であり、世界各地の徒弟制型訓練と共同作業を事例にした優れたモノグラフでもある。正統的周辺参加 (LPP) という概念は、状況論的アプローチと実践共同体論の特徴を的確に表現しているように思われる。「正統的」(Legitimate) とは、成員資格を持たない人々を共同体の潜在的メンバーとして受け入れることであり、「周辺の」(Peripheral) とは、新参者が最初は重要なスタッフ (先達) の周りでウロウロしながら周辺の仕事をしつつ学習しているが、技能の向上に伴い重要な仕事を任されるようになることを言い表している。さらに、「参加」(Participation) は、知識＝技能の獲得パターンと存在様式を示す概念である。知識＝技能は、本の中に存在する何かであるというよりも、実践共同体の諸関係と諸々の実践の中に埋め込まれているから、知識＝技能を習得するためには実践共同体に参加しなければならない。注意すべき点は、共同体を実体的に捉えてはならず、人やものや実践が織りなす諸関係の「弁証法的でダイナミックな過程」が共同体の内実になるということである。安定した集団と組織の構造、制度的な地位＝役割の体系、それらに対応する安定した自我構造と知識の体系、さらに所与の技能＝知識の学校教育的学習などを想定した社会理論は、状況論的アプローチや実践共同体論とは対極的な立場になるだろう。もちろん、徒弟制を事例にする正統的周辺参加論の場合には、「構造化された共同体に包摂されていく過程としての学習」のイメージを喚起する視点を含んでおり、規範主義的な社会理論のネガティブな方向に傾きやすいので注意しなければならない⁽⁸⁾。

「ある程度確立されている安定的な共同作業システム」「日常繰り返し用いられているコミュニケーション行動の様式」「ある程度確立されている認知の枠組み」が、現場に参加しているメンバーたちの実践によって学習されつつ再構築されていく過程に注目するダイナミック視点こそが、状況論的アプローチと実践共同体論に含意されている積極的方向である。共に企図し事業に参画する、共に作業する、共に学習するという複数の側面を結びつけて実践と共同体を

把握するかぎり、既成の鑄型と制度的構造に参加者たちをはめ込むことは、絶えず乗り越えなければならない一つの中間的段階になるだろう。言い換えれば、正統的周辺参加が進行する過程で、各参加者と対象世界との関係、参加者間との関係、自己認識と他者認識のあり方が次第に変容するが、変容の方向はいずれ既成の枠を突き破っていくだろう。同じ鑄型と構造の単純な再生産を主張する言説は、本稿が取り上げたアプローチと理論の中に特殊なケースとして包括されるだろう。相対性理論の中に特殊なケースとしてニュートン力学が適切に組み込まれたように。実践共同体と正統的周辺参加の積極的な内実をしっかりと見極めるために、次節では組織とコンフィギュレーションに関するヘンリー・ミンツバーグの言説を取り上げてみよう。

(2) 組織とコンフィギュレーション

前の第1章において概観した技能に関する4つの学説は、人間の固有の能力ないしは技能を強調している点で共通しているが、そのような技能はノウハウとも言うべき直観やコツを核とする柔軟な対応力であり、試行錯誤を伴う経験を通じて培われると考えられている。第2章の(1)では、技能が習得され創造的に発展していくための社会的媒介過程である実践共同体の仕組みを論述してみた。実際には個別の身体を持つ個人が技能を学習し行使するとはいえ、状況論的アプローチに依拠すれば技能学習と技能行使を取り巻く諸関係とプロセスに関する適切な描写(脱中心化戦略による描写)が欠かせない。そのような描写を通じてこそ「個人と技能との関わり」が、明らかになるだろう。だが、実践共同体論では、営利企業、役所、学校、病院などの組織の制度的構造が十分に議論されているわけではないので、実際に技能が形成され、発揮されていくプロセスを抱えている組織の仕組みが解明されなければならない。技能論と実践共同体論に接合できる体系的な組織論の構築を試みているミンツバーグの組織論を整理して、科学の世界を含む社会の諸領域における実践共同体と組織の形成、ならびに知識=技能の習得(人づくり)を議論するための手がかりを探ってみたい。

さて、ある状況の中で何らかの目的を達成するために複数の人間が協力して活動するとき、実践共同体と組織という現象が現れる。誤解される恐れがあるかもしれないが、実践共同体のプロセスから特定の規則や地位=役割や認知枠組みが生成され、制度化されるとき、組織という社会形象を語るができるようになる。ウエンガー等の実践共同体論では、残念ながら(いや幸いにもというべきか)組織の構造と過程に関して直接語ることはできない。人文社会科学には組織現象を研究するための様々な組織論があるが、ミンツバーグの場合は組織内の6つの基本的部分、組織外の影響力、6つの整合機制、分権化の6つの基本的類型、および組織のコンフィギュレーションという視点から組織の仕組みや働きを捉えていく⁽⁹⁾。紙幅の都合上、詳細な論述は控えるが、組織の6つの基本的部分とは、作業核(オペレーター)、戦略尖(トップマネジメント)、中間ライン(中間管理機構)、テクノ構造(管理と組織のアナリスト)、支援スタッフ(組織を外から支える人々)、イデオロギー(価値や規範)である。また、組織は複数の人間の活動を適当な形に配分(分割)し統合(結合)することによって成り立つと考えられるから、その配分(分割)と統合(結合)の仕組み(ミンツバーグは整合機制と呼ぶ)を明らかにすれば組織の形態ないしは構造が把握できる。整合機制には次のような6つの形があ

る。相互調整、直接監督、仕事過程の標準化、アウトプットの標準化、技能＝知識の標準化、規範の標準化。組織と技能形成、あるいは組織における人材の問題を考察する際に、6つの整合機制は非常に有効な視点を提供してくれる。

6つの基本的部分と整合機制を前提にすると、ある状況の中で現れる組織は7つのコンフィギュレーション(組織の形)のいずれかに近い形態になるという。コンフィギュレーション(configuration)とは、一般には部分や要素の配列またはシステムとしての構成を表す言葉であり、ミンツバーグはそれを組織論の基本用語に据えて、自らの立場をコンフィギュレーション・アプローチと名づけている。組織内外の諸部分や力が特定の部分や力を中心に調整(整合)され、一定の形(コンフィギュレーション)を持つ組織に編成されると見なし、整合機制のあり方によって7つのコンフィギュレーションに分類できるという。ミンツバーグは数多くの著書と論文の中でコンフィギュレーションについて繰り返し論述しており、彼の組織論と経営学の軸となっていると考えられるので、彼の論述に基づいて7つのコンフィギュレーションをまとめておこう。

①企業家的コンフィギュレーション(企業家的組織 **Entrepreneurial Organization**)：戦略尖のトップマネジメントの指導力と意思決定力が非常に強く、トップの企業家の戦略的ビジョンによって組織内外の諸部分と力が統制されるようになると、企業家的と呼ばれる集権化されたコンフィギュレーション(組織)が現れる。中間ラインや支援スタッフやテクノアナリストなどは独立した形では存在しない。いわゆる創業者社長のワンマン経営組織などがこのコンフィギュレーションに近い。

②機械的コンフィギュレーション(機械的組織 **Machine**)：理論的に見ると、たとえばテクノアナリストが科学的管理法などによって仕事過程を標準化し、作成した合理的な規則と分業体系に基づいて組織が作られるとき、機械的コンフィギュレーションになる。能率を向上させようという要求が非常に強い場合に、組織内外の諸部分と力はひたすら能率を高めるために調整されるようになる。合理的に階層化されたライン・アンド・スタッフ体系を備えた、いわゆる官僚制組織が現れる(階層化された集権化)。

③多角的コンフィギュレーション(多角的組織 **Diversified Organization**)：中間ラインのマネジャーたち(特に部長クラス)が自分たちの部署を独立させようとし、組織内外の諸部分と力を調整するときに多角的コンフィギュレーションが生まれやすい。事業部制組織のような形になり、事業部ごとに業績の目標水準が設定され(アウトプットの標準化)、組織全体のトップマネジメントが本部と事業部を結合する役割を担う。個々の事業部は業績の目標水準を達成するために能率志向になるから、機械的組織になりやすい(事業部への分権化と事業部内の集権化)。

④専門職業的コンフィギュレーション(専門職業的組織 **Professional Organization**)：作業核のメンバー(オペレーター)たちが、自分たちの専門的スキルを拠り所として仕事の遂行を図ろうとする要求が強い場合には、組織内外の諸部分と力は作業核を中心に構造化されるようになる。その結果生まれる形態が専門職業的コンフィギュレーションであり、トップマネジメン

トや中間ラインやテクノアナリストなどの部分は非常に小さくなる（作業核への完全な分権化）。ただ、専門的技能を持つエキスパートたちの作業が、円滑に遂行されるために必要な支援スタッフの部分は相対的に大きくなるだろう。一般に、教育研究者や医師などのエキスパートが集まる大学や病院が、専門職業的組織の形に近い。

⑤革新的コンフィギュレーション（革新的組織 **Innovative Organization**）：新しい事業や創造的な仕事をしようという要求が非常に強い場合には、組織や個人は不確実な状況に身を置くことになり、臨機応変に立ち回らねばならなくなる。従来慣例、規則、技能はそのままでは通用しなくなるから、過去にとらわれない、柔軟で臨機応変型の組織編成が必要となるだろう。その結果生まれるのが革新的コンフィギュレーションであり、メンバーがそのつど相互調整しながらチームを作り仕事を進める形になる（アドホクラシー **Adhocracy** 型チームへの完全な分権化）。習得した技能を「通常の課題に対して通常のやり方で」応用する場合には、専門職業的組織でよいけれども、高度な技能を「新しい課題に対して新しいやり方で」応用しなければならない状況では、アドホクラシーという民主主義的チームをベースとする革新的組織を形成するようになるだろう。

⑥伝導的コンフィギュレーション（伝導的組織 **Ideological Organization**）：ある特定のイデオロギーを実現しようとする要求が非常に強いとき、組織内外の諸部分と力はイデオロギーに合うように調整され、伝導的コンフィギュレーション（伝導的組織）が形成されるだろう。イデオロギーを個人個人が内面化し、自己の内部のイデオロギーを拠り所に活動するようになると、トップマネジメントも官僚制的機構もチームワークも、そして専門技能による共同作業も不必要になるだろう。そこには、純粋な分権化が現れるといえよう。

⑦政治的コンフィギュレーション（政治的組織 **Political Organization**）：多くの個人や組織の諸部分が自己の支配力を追求する政治活動に専心するようになると、いずれの整合機制や諸部分の調整力も有効に作動しなくなり、組織は分裂状態になる。その結果現れる、いわば組織の限界状況が政治的コンフィギュレーション（政治的組織）である。そこでは、どんな安定した集権化と分権化の形も見られない。

以上の7つのコンフィギュレーションが理念型のような概念として設定されているが、現実の組織は純粋にいずれかのタイプにきれいに分類されるわけではなく、いくつかのコンフィギュレーションが混合した形として特徴づけられるだろう。ただし、いずれか一つのコンフィギュレーションに最も近い形として位置づけられる現実の組織も少なくないと思われる。その意味では、組織のコンフィギュレーション図式は、分類と分析と記述のための重要な用具となるだろう。

次に、組織のコンフィギュレーション図式の視点から、組織のメンバーの技能や能力の問題について考えてみたい。まず機械的組織では、テクノアナリストが作成した組織の規則や仕事の技術的体系に従って、ほとんどのメンバーが作業するように義務づけられる。極端な事例でいえば、かつてのアメリカのフォードやゼネラルモーターズの自動車工場における生産労働者

のように、機械に合わせて細分化された課業を規則通りに実行することが求められ、技能習得には余り時間がかからず単純な技能労働のレベルにとどまってしまう。ドレイファスの技能獲得の図式で見れば、初心者からエキスパートまでの五段階のせいぜい中級者程度で技能向上は終了するだろう。プロとかエキスパートのような高度な技能レベルは必要ない。それに対し、大学や病院などの専門職業的組織では、作業核のメンバーの多くは、大学院レベルの高等教育を通じて習得した高度な専門的知識と技術を仕事のために活用している。注意すべき点は、高等教育終了後に採用された職業組織においてOJT（仕事を通じての訓練）の経験を積み重ねながら、抽象的な専門的理論を高度な実践的技能にまで発展させていくということである。幅広く深い経験に裏打ちされた、エキスパートの技能に上昇するようになる。そのようなエキスパートの技能を軸とする形に組織が編成され、作業が遂行されるし、逆に新入のメンバーはベテランのエキスパートと一緒に作業する過程を通じて幅広い実践的な技能を獲得する。

初心者か中級者レベルで終わる単純労働と、医者や研究者のようなエキスパートという極端なケースを取り上げてみたが、組織に多様性があるようにメンバーの仕事や技能レベルにも多様性があるだろう。小池和男の知的熟練理論に描かれている技能形成方式を考えると、多くの職業組織ではメンバーは、いろいろな仕事を経験する過程で少しずつ技能を高めていく。多様なレベルの技能を持つメンバーに支えられる形で、現実の組織は固有のコンフィギュレーションに構成され、機能している。組織の環境が不安定で変動しているのか、それとも安定していて予測しやすいのか、また組織の主な目的や課題は何のなのかに応じて、組織がどのようなコンフィギュレーションに近くなるのかは規定されるだろう。そして、形成された組織のコンフィギュレーションに応じて、必要とされる技能や技能形成の方向も変わるだろう。小池が規定した知的熟練は「問題と変化をこなすノウハウ」であり、そのままでは抽象的すぎて具体的内容を把握しにくいけれども、それぞれの領域におけるレベルの高いプロかエキスパートの段階を想定しているようにも思われる。ミンツバーグはマネジャーの仕事を研究テーマにしているが、企業経営ないしは組織経営の領域で見れば、対人関係の役割、情報関係の役割、意思決定の役割という役割群から成るマネジャーの仕事をこなすためには、幅広く深い経験に裏打ちされた技能が要求される。ドレイファスが指摘したように、経営学の教科書に書いてある原則に忠実に従って仕事をするマネジャーは初心者か中級者のレベルになるだろう。幅広く深い経験の蓄積を持つマネジャーは、直観やコツを活用しつつ多忙な役割をこなしていくだろう。

また、既述の通り、熟達化の認知科学的研究では、熟達者（エキスパート）を手際のよい熟達者（定型的熟達者）と適応的熟達者に区別する学説が有力となっている。たとえば、算盤のエキスパートは手際のよい熟達者の代表例であり、技能の遂行の速さと正確さの点で群を抜いている。それに対し、音楽や美術などにおける天才的芸術家は技能の正確さでも優れているが、それ以上に創造性の点で卓越している適応的熟達者の代表例である。組織と関連づけるならば、専門職業的組織を構成する多くのエキスパートは、手際のよい熟達者のタイプに近いのに対し、適応的熟達者は革新的組織に適合するタイプであるか、または組織そのものに馴染まない存在だろう。熟達者と組織との関連は、機会を改めて再検討してみたい。

ところで、本節の冒頭で、実践共同体から生産された諸要素が制度化されるにつれて組織と
呼ばれる社会形象が形成され、組織について語るができるようになると述べたが、それは、
裏返せば実践共同体の存立可能性が次第に小さくなり実践共同体について語る事が困難にな
ることを意味するだろう。ただ、組織の機能的単位やチームやネットワークとは異なる形で、
メンバーたちがお互いに自発的に共通の課題と状況を認知し、課題解決に向けて共に学習しな
がら共に作業する過程が出現すれば、それを実践共同体と呼んでも差し支えない。したがって、
ミンツバーグが記述した7つの組織のコンフィギュレーションには、程度の差こそあれ常に実
践共同体が生成する可能性があり、組織内に生まれた実践共同体は組織の過程を活性化したり
、組織構造に革新や変動をもたらすかもしれない。組織の制度化が進んでいる②機械的、③
多角的コンフィギュレーションと、権力が集中している①企業家的コンフィギュレーションで
は、実践共同体が生成しにくく、また持続しにくいのに対し、専門的技能を拠り所とする作業
集団が強い④専門職業的コンフィギュレーションと、制度化の度合いが低く権力統制の弱い他
のコンフィギュレーションでは、実践共同体が生まれやすく、かつ持続しやすいと考えられる。
とりわけ、革新的コンフィギュレーションは実践共同体とほぼ同じ特徴を持っている組織形象
である。

3. 社会学者のメチエと実践共同体——ブルデュー社会学の再考——

これまで論述してきた技能論と実践共同体論の発展はいずれも1960年代以降に顕著になって
いるから、ブルデューが社会学者として研究活動を展開した時期とほぼ対応している。仮に交
流があったにせよ、異なる領域の学問の間にこれほど見事な並行現象（異分野間の認識と言説
の構造的類似性という現象）が見られるのは、単なる偶然というよりも現代社会の思考の潮流
を示しているのではなからうか。学問の場だけでなく日常生活の場でも頻繁に使われる「モダ
ン—ポストモダンの図式」で眺めてみれば、近年の技能論と実践共同体論はモダンからポスト
モダンへの変容を象徴する言説のように思われる。「モダン—ポストモダンの図式」を議論す
ることは差し控えて、本章では、技能論や実践共同体論との親和性が高いブルデュー社会学の
言説を取り出ししながら、社会学者のメチエ（*métier, craft*、職業的技能）の問題を考えてみた
い。

(1) ブルデューの認識論と実践理論

ブルデューは1968年に認識論の宣言書ともいべき『社会学者のメチエ』を刊行してから、
1970年代には実践理論の構築を推し進め、1980年に集大成として『実践感覚』をまとめている。
そして、1980年前後からは『ディスタンクシオン』『ホモ・アカデミクス』『国家貴族』『芸術
の規則』といった、彼自身の理論に基づく経験的研究の成果を著している。そこで、技能論と
実践共同体論に関連する理論的要素を引き出すために、主に『社会学者のメチエ』と『実践感
覚』に焦点を当てていこう⁽¹⁰⁾。

最近、ミッシェル・フーコーの思想とフランスのエピステモロジーとの関連を解明したガ
リー・ガッティングや金森修の研究が発表されているが、ブルデューの社会学、特に認識論も

フランスのガストン・バシュラールやジョルジュ・カンギレムを軸とするエピステモロジーの伝統を受け継いでいる⁽¹¹⁾。もちろん、フーコーとは異なりマックス・ウェーバーやマルクスや現象学などのドイツの思想を、もう一方の方法論的基礎として受容したために、ブルデューの社会学はフーコーの思想とは異質な作品に仕上げられた。『社会学者のメチエ』は、方法論の宣言書であると同時に、本のタイトルが象徴しているように知的職人としての社会学者の技能を養成するための指導書でもある。初版は三十年前に発表されたとはいえ、現在でも知的職人をめざす者が学ぶべき点が多い。重要なポイントを整理していくと、社会学者を含め科学者の活動は、認識論的切断 (la rupture épistémologique)、対象の科学的構成 (la construction de l'objet)、事実確認 (constat、仮説の証明のために実践する経験的研究) という認識論的行為の論理に則って展開されなければならない。認識論的切断から対象の科学的構成までの実践論理が、最も重要であり科学的研究の妥当性を左右する。周知の通り、認識論的切断はバシュラールの科学哲学から受け継いだ概念であり、日常生活にしばしば見られる雑多な知識による前科学的構成作用、予先観念、自生理論などの認識論的傷害 (obstacles épistémologique) が「真理の科学的探究」を妨害することに対する監視や認識論的警戒 (vigilance épistémologique) を説いたものである。無意識のうちに科学者の心と身体の中に入り込んでいる多様な認識論的傷害を摘発して、科学的活動から排除していくことは容易なことではないけれども、自己自身の冷静な認識論的警戒に加えて、偉大な先人たちの妥当な研究成果から学び、また同時代の同僚からの監視や批判を謙虚に受けとめれば、徐々にではあるが認識論的切断を推し進めていくことができるようになるだろう。

例えば、人種差別の問題を研究する場合に、国家が支配者の立場からカテゴリー規定しながら集めているデータを一次資料としてそのまま利用したり、既成の人種カテゴリーを無批判的に使用したり、さらにまた接近しやすい人々にだけ通常の言葉を使って当たり前の質問をしたりするようでは、認識論的切断の努力をせずに認識論的傷害に浸りきったまま「似非科学的活動」をしているにすぎない。フッサールの現象学やシュッツの現象学的社会学とは異なり、バシュラールやブルデューたちのエピステモロジーでは日常生活の認識枠組みと科学の認識枠組みとの異質性が強調されており、多様な認識論的障害を自然なものとして受容する日常知に対する認識論的切断を媒介にしてこそ科学の知は妥当な形に構成される。とにかく多少の困難があっても、時間と労力がかかっても、先人と同時代の同僚の研究成果から適切な認識枠組みを導き出しながらカテゴリー規定と問題設定を試みなければならない。そこから、対象の科学的構成が可能となるだろう。事実確認の段階では、経験的研究の技術的道具立てをどのように選んでいくかがポイントになるが、統計調査や実験の高度な技法の「科学的中立性の幻想」に惑わされないようにするためにも、対象の科学的構成との絶えざる往復が要請される。

1960年代後半に宣言された認識論は、ブルデュー自身の回想によれば当時のフランクフルト学派やアルチュセール主義、ならびにアメリカのラザースフェルドを主たる批判対象とした立場であった。前者は理論主義であり、経験的研究による認識論的事実確認を怠っているのに対し、後者は調査至上主義＝実証主義であり、事実確認以前の認識論的切断と対象の科学的構成

という認識論的努力をしていなかった。理論的省察と実証的証明とを妥当な仕方で接合しなければ、科学的認識の過程は発展しなくなるだろう。70年代以降になると、さらにいろいろな研究成果を組み込んで「社会学の社会学」(sociology of sociology)、ないしは反省的社会学 (reflexive sociology) へと発展していく。場や社会空間などの概念が構築されるにつれて、社会学者自身が自己の認識活動を特定の場や社会空間に配置することによって、認識活動の位置を測定し認識の客観性を絶えず反省するように要請される。しかも、科学者の反省活動には終わりが無い。また、科学者個人による一連の認識論的行為は、他者との相互作用を媒介として妥当性を高めていくから、科学者の共同体によるサポートと監視が必要となるが、後ほど実践共同体論との関わりで再検討してみたい。

『社会学者のメチエ』では、著者たちの立場から妥当性を持つと評価された偉大な先人たちの豊かな研究成果に関するテキスト解釈の方式に則って、最も適切なものと考えられる認識枠組みが提示されている。後の著作において発生的構造主義、構築主義的構造主義、あるいは関係主義的思考と命名された枠組みであり、1970年代の実践理論の構築を推進した認識論的立場である。ここで『実践感覚』を中心に実践理論の要点をまとめておこう。『社会学者のメチエ』から微妙にスライドしつつ『実践感覚』では、戦後のフランスの思想界において一世を風靡したレヴィ=ストロースやアルチュセールの構造主義、メルロ=ポンティエーの現象学やサルトルの実存主義が批判と統合の標的になる。まず、構造主義の規則=モデル偏重主義によれば、研究者が考案した部族社会のモデルの通り部族民は社会的規則(モデルに体系化されている規則)に従って生活しており、部族民自身は背後で作用している自分たちの社会の仕組みと規則を知らないで行動しているのに対し、研究者は部族社会全体の仕組みと規則を客観的に認識しているから部族民の行動をよりの確に説明できる。ブルデューが批判する点は、硬直した構造主義が数学的手法に基づいて構造(社会関係=ネットワークの体系)の論理的一貫性を追求する余り、部族民たちの多様な感情や動機による慣習行動が織りなす、錯綜した、矛盾に満ちた現実を把握できないという点である。背後で作用している社会的ネットワークの体系と規則を指摘するがぎりでは有意義な視点を提供するけれども、当事者の慣習行動の多様な動機を捉えそこなっているために、矛盾した現実の行動、すなわち実践の論理を説明できない。もう一方の批判対象である現象学と実存主義は、行為者個人の固有の動機や意図を余りに尊重しすぎるために、背後で作用している社会構造と規則の力を正当に評価することができない。真空の中で、あるいは歴史や社会と切断された純粹空間の中で個人が思いのままに不条理な行動を選択できるものとみなすために、社会的存在としての個人の社会的行動の実践論理が視野から抜け落ちてしまう。

構造主義が数学的手法で解明しようとした、背後で行動を規定する社会構造と、実存主義が人間存在の絶対的価値を求めようとした個人の侵犯されざる意志=主観的意味とを接合するために提唱されたのが、ブルデューの実践理論である。身体、時間、構造、資本、表象(象徴)、支配、実践、ハビトゥスが実践理論を構成している基本概念であり、『実践感覚』において体系的に論述されている。紙幅の都合上、ブルデューの言葉を引用して実践とハビトゥスを中心

に素描してみると、まず社会の現実をリアルに説明するためにどうすべきかという問題提起をしながら「そのためには実践に立ち戻らなければならない。…… 歴史的实践の客観化された生産物と身体化された生産物との、諸構造とハビトゥスとの弁証法の場所たる実践に。」⁽¹²⁾という具合に、実践の戦略的重要性が強調される。また、「ハビトゥス (habitus) とは、持続性をもち移調が可能な心的諸傾向のシステムであり、構造化する構造として、つまり実践と表象の産出・組織の原理として機能する素性をもった構造化された構造である。そこでは実践と表象とは、それらが向かう目標に客観的に適応させられうるが、ただし目的の意識的な志向や、当の目的に達するために必要な操作を明白な形で会得していることを前提してはいない。実践と表象はまた、客観的に『調整を受け』『規則的で』ありうるが、いかなる点でも規則への従属の産物ではない。」⁽¹²⁾さらに、ハビトゥスの二重性 (社会的存在拘束性と主体性) について次のように述べている。「ハビトゥスとは、歴史的・社会的に状況づけられたハビトゥス生産の諸条件を限界としてもつ生産物—思考、知覚、表現、行為—を、(制御を受けながらも) 全く自由に生み出す無限の能力なのだから、ハビトゥスが保証する自由、条件づけられ、かつ条件づきの自由は、初期条件づけの機械的な単なる再生産からも、予見できない新奇なもの創造からも、等しくかけ離れたものである。」⁽¹³⁾ブルデューは、過去の数多くの実践の産物である歴史的な社会的文化的諸条件 (社会構造) の拘束力を正當に評価しつつ、他方では個々の人間が持つ柔軟な対応力と創造力を守ろうとする。そこで提唱されたのが実践とハビトゥスの概念であり、それらは過去の歴史的産物や蓄積を背負った人間のダイナミックな心的=身体的構造の「プロセス」を表す概念である。

バシュラールやカンギレムに限らず、ルソーやデュルケームの言説にも見られるような、フランスの客観主義と集合主義のエピステモロジーの伝統をベースにしながら、ブルデューは、実存主義の主体主義とともにマックス・ウェーバーの行為論とマルクスの歴史理論を実践理論の中に組み込んでいる。社会学から見て注目したいのは、ウェーバー社会学に欠けていた身体論の視点が導入されて実践理論と技能論との接合が容易になった点である。そこで、次節では既述の技能論と実践共同体論を参照しながら、ブルデュー社会学に散見される社会学者のメチエと実践共同体の言説を検討してみよう。

(2) 社会学者のメチエと実践共同体

1988年、「ブルデュー自身が語る『社会学者のメチエ』』というインタビューの中でブルデューは次のように語っている。少し長くなるが、引用してみたい⁽¹⁴⁾。

『『社会学者のメチエ』は、つねにフランス語の意味でのメチエ (メチエをもつ、それはハビトゥスをもつ、実践的にマスターするということです) について語っているにもかかわらず、教師調の語り口なので、どこかしら滑稽です。…… メチエというのは、大部分、実践的に伝達されるものであり、それを伝達できるためには、そのメチエを体の奥底にまで身につけている必要があります。…… 私はちょっとばかり古参の医者のようなところがあって、社会学的悟性が陥りやすい病気をすべて知っている。どんな誤りに陥る先有傾向があるのかは、性別、出身階層、身につけた知的素養によって異なっています。…… 私の研究ディレクター

としての経験に、私自身が自分の経歴のあれこれの時点でかかったことのある病すべてについての経験、さらに私がこれまでに犯した誤りすべてについての経験を加えなければいけませんね。これらの経験のおかげで私は、年季の入った職人のように、対象構成の原理を実践的に教えることができるのだ、と思っています。」

この引用文では、『社会学者のメチエ』の刊行二十年後に回顧して当時の自分たちの未熟さが指摘されている。そして、社会学者として二十年の試行錯誤の経験を積んだ後に、かつて書いたテキストの教師風の体裁や語り口を反省しつつ、今ならメチエを「年季の入った職人」として実践的な仕方で示すことができると自負している。おそらく、ブルデューの現在までの素晴らしい研究業績を生み出した「社会学の社会学」=反省的社会学の真髄は、この引用文に表現されているように思われる。1章において取り上げたミンツバーグ、小池、ドレイファス、熟達化研究の技能論の言説と呼応する要素が多い。科学的経営管理の技法、コンピュータの計算的合理性、さらに科学的意志決定分析と数学的モデル等は確かに優秀な理論的道具といえるにせよ、錯綜した現実に対応できる人間の熟練の中に融合しなければ、絵に描いた餅のように味も素っ気もない、机上の空論になるかもしれない。試行錯誤の経験を積んだ経営者の実践的経営能力、幅広く深いOJTによって培われる知的熟練、ビギナーから経験を積んで到達するエキスパートの熟慮的合理性、適切な評価基準を体得した適応的熟達者の柔軟な対応力と創造力。いずれの言説が強調する熟練技能も、ブルデューが語っている社会学者のメチエと響き合う。1968年の初版本は、ドレイファスが述べた中級者レベルに対比されるような教科書風の語り口であったけれども、二十年の経験を経た1988年ならば、エキスパートレベルの語り口で実践的なテキストを作成できるというわけである。

ブルデューの社会学者のメチエ論は、彼自身の実践理論の特殊ケースであるが、パシュラールの適応合理主義 (*le rationalisme appliqué*) と新しい科学的精神の言説を基軸にして構築された科学者技能論とみなすことができるだろう。認識論的傷害の自覚から始まって、認識論的切断を媒介とする新しい認識枠組みの構築と対象の構成、さらに仮説の経験的証明まで一連の認識論的行為は、絶えざる軌道修正を含んでいるプロセスになる。ある意味では、科学に関しては暫定的真理しか認めない、すなわち永遠の普遍妥当な真理を認めない厳しい立場である。仮に先人の業績を批判的に継承して、苦勞の末に新しい成果を生産しても、いずれ次代の研究者によって乗り越えられたり捨て去られたりしていく。ただ、歴史の中で批判的継承と伝達をする、一步前進する、あるいは誤りを指摘するという重要な役割を実践していると考えれば、科学者の適応合理主義も非常に意義のあるものに思えてくる。

ところで、社会学者のメチエや科学者の適応合理主義は個人の実践の問題にとどまるわけではなく、実践共同体や組織や社会の問題にもなる。全体社会のレベルはひとまず置いて、2章において実践共同体と組織の議論をしたので、それらと関連づけて考えてみよう。

正統的周辺参加論から見れば、社会学を学び始めた、ないしは研究し始めたばかりの者は新参者であり、経験を積んだ社会学者から勉強や研究の指導を受けながら共に実践的な活動をしなければならぬ。伝統芸能とか職人の世界では、適当な師匠に弟子入りして芸能や仕事の現場

で共に活動する過程で、書物だけでは会得できないノウハウを現場の諸関係と諸々の実践から学び取っていく。ふつうは師匠が一つ一つ丁寧に口頭で説明するわけではなく、師匠の芸術的所作と対人的行動、あるいは現場に埋め込まれている多様な要素から、弟子自らが失敗を重ねながら体得していく。そして、ビギナーの段階からプロやエキスパートの段階に到達すると、師匠を超えて自分独自の芸風を創造していかなければならない。それが実践共同体の学習であり、学校教育における「文脈から分離された象徴的学習」とは異なる実践的姿である。芸能とふつうの職人の実践共同体の仕組みを、そのまま社会学という学問の世界に当てはめることはできないけれども、実践共同体としての構造的類似性は想定できるだろう。特に社会学の場合には、現実の世界から逃避して「数式を書く、ゲーム理論の訓練をする、コンピュータのシミュレーションをするだけでじゅうぶんだ」というわけではなく、「(現実の) つねに複雑なもの、混乱したもの、不純なもの、不確かなもの、つまり知的厳密さについての通俗的なイメージに逆らっているものすべてを扱う用意がなければならない。」⁽¹⁵⁾ 社会学者のメチエを体得するためには、偉大な先人たちが残した書物を読むことから、社会の現場に出て経験的研究を実践することまで、幅広く深い学習が要求されるだろう。その際に、先輩や同僚との関係を軸にして共に作業する、共に批判的に検討する、共に学習する、共に創造するという形で適応合理主義的に進まなければならない。ブルデューの著作には、『ホモ・アカデミクス』のように大学世界の闘争と「腐敗」を暴き出した論争的な作品はいくつかあるのに反し、実践共同体論を直接テーマにした建設的な論文はほとんど見あたらないけれども、『社会学者のメチエ』の中でバシユールの実践共同体論ともいうべき適応合理主義と連携合理主義 (corrationalisme) の言説を引用している箇所が少ないので、メチエを科学者の共同体と結びつけて捉えていたものと推測される。『社会学者のメチエ』の中に「学者共同体 (cité savante) と認識論的警戒」という見出しの数ページ足らずの論述があるので、それに即してブルデューの科学者の実践共同体像について触れてみよう。

知識社会学である「社会学の社会学」(反省的 sociology) が、社会学的慣習行動 (実践) を認識論によってコントロールする有効な手段になるとはしながらも、ブルデューは認識の客観性を獲得=保証するための社会的条件を問題とする。「科学の客観性は、学者個人の抱く客観性のような不確実な基礎のうえに立脚することはできない。認識論的コントロールの社会的諸条件がいったん確立されなければ、つまり何をおいても社会学的慣習行動についての社会学で武装した批判の『一般交換』が成立しなければ、認識論的反省の成果を、慣習行動のなかに実際に体現させることはできないのである。」⁽¹⁶⁾ ここで指摘されているポイントに関して検討すると、まず反省的 sociology を体得した学者たちが、批判の「一般交換」と呼ばれる、真理のための相互批判の開かれた議論を押し進めることができなければならない。後半部に関する補足を引用すると、「科学的な成果が生み出されるかどうかの可能性は、科学共同体が科学共同体として、無関係な外部からの要請 (知的公衆の期待や研究資金提供者の圧力や多様なイデオロギーなど) に対して対置しうる抵抗の力に依存するのみならず、共同体独自の組織が維持するに至った科学的規範に対してどれだけの一致がみられるか、その程度にも依存している。」⁽¹⁶⁾ 結局の

ところ、批判の「一般交換」のルールを、共同体の最も重要な規範として学者メンバーたちが受容しなければならぬ。そうすれば、「情報の流通や相互批判を強化し、お互い機関が別々であるために維持されている認識論上の孤立集団を破壊し、名声や地位のヒエラルキー、教育やキャリアの多様性、内に向かって閉ざされた党派の増加などに由来するコミュニケーションの障害を打ち破ったりといったような、お互いがオープンに競争したり争ったりするのに貢献できる一切の要素こそ、制度の慣性にしたがっている学者共同体を、…… 学者たちの理想の共同体に近づけていくことができるのだ、という点については容易に同意が得られよう。」⁽¹⁶⁾ 要するに、批判の「一般交換」の原則と「批判の連続的ネットワーク」に基づく「相互監視のシステム」が、個々の学者の妥当な実践的認識論的行為能力を養成し、個々の学者の能力が向上すれば学者共同体は、質量共にグレードアップした科学的成果を生産できるようになるだろう。このような学者共同体論を提唱したブルデューは、研究者としての道を歩み始めた1950年代の終わり頃にアルジェリアにおいて共同研究を実践し『アルジェリアの社会学』などの傑作を産み出したが、異分野の複数の人間の共同による経験的研究の実践というスタイルによって、その後も『再生産』『ディスタンクシオン』等の傑作を次々と生産していく。また、『社会学者のメチエ』という著作は、既成の高等教育機関の枠にこだわらない、社会科学高等研究院という場において学生のために作成された実践的認識論の指導書であり、正統的周辺参加の視点から研究者を育てるといふブルデューの意欲が伺える。

組織論の領域に関連するが、周知のようにブルデュー社会学の中で教育は最大のテーマの一つであり、フランスの学校教育を一貫して批判している。なぜ、どこがどのように悪いのか？ 合計すれば千ページ以上にも及ぶ教育社会学の論述を、簡単に要約することはできないというものの、学校の官僚制化に伴うマイナス、ならびにエリートと階級構造の再生産装置としての教育制度というポイントは指摘してもよからう。『遺産相続者たち』と『再生産』には、大学教員と学生とのなれ合い、教員同士のなれ合い、さらにまた『ホモ・アカデミクス』では学問世界における派閥の形成や多種多様な争いなどが記述されており（本稿を書いている筆者にも思い当たる、面白いが、頭の痛い記述が多い）、実践共同体の理想とはかけ離れた現実が浮かび上がってくる。それらは、一貫してネガティブな語り方であり、裏返せばブルデューの実践共同体論をかいま見させてくれる語り口調かもしれない。なれ合いや醜い争いを描き出すことを通して、適応合理主義と連携合理主義に基づく、共に作業する、共に批判的に検討する、共に学習する、共に創造する実践共同体が語られているように想像できる。個人の名誉や権力や私的利益のために派閥を作ったり争ったりすることにエネルギーを傾けているようでは、認識論的障害を切断することをめざして相互に批判し合い、学習し創造する実践共同体は構築されない。ミンツバーグの組織論から見れば、一般に大学は専門職業的組織に近似した組織構成を持ち、専門家、財政や庶務や設備や教務の職員、学生、その他の支援スタッフといった異質なメチエを期待される人々がメンバーとなり、また周辺には公共機関や多様な利害集団が関与しているから、革新的コンフィギュレーションのような、既成の暫定的真理を批判的に検討しながら必要な場合には新しい真理を生産できる、科学者の創発的な共同体にはならない。すな

わち、社会制度の中に埋め込まれた専門職業的コンフィギュレーションの場合では、エキスパートも既成の知識＝技能を拠り所にして再生産的に活動しがちであり、新たなものを創造する、または再構築する方向に向かうことは容易ではない。むしろ、社会の権力中枢から自律した、領域ごとに結成される学会、あるいはテーマごとに活動する研究会のような組織の方が、科学者の創造的な実践共同体になりうるだろう。それらの中にも、なれ合いや争いは生まれるかもしれない。なれ合いや争いは安易な妥協や相互不信や憎しみを生み出すために、適切な認識論的行為の実践と実践共同体の構築を妨げるだろう。『ホモ・アカデミクス』が描き出した大学世界の権力闘争と「諸悪」に関しては、社会学的には大変に興味深い現象ではあるけれども、余りに論争的なテーマなので今回は取り上げないことにする。差し当たり次のことだけを指摘しておきたい。

理想と現実との間に多少のズレが生じるのは、致し方ないとしても、問題は、適応合理主義と連携合理主義の態度を習得した科学者、すなわち科学のメチエを体得した知的職人が真摯に活動するかどうかである。ブルデューが好んで引用するバシュラールの言説によれば、科学の合理的思考の論理は、「私は考える」(コギト cogito) にととまらず「私たちは考える」(コギタムス cogitamus) にまで発展することを要請する規範である⁽¹⁷⁾。真理が獲得されるのは、合理的思考の実践共同体におけるコギタムスを媒介としてであり、また科学の真理は暫定的なものであるから認識論的切断の努力を怠ってはならない。いい意味での相互監視の下に、お互いにコギタムスを実践すべきであろう⁽¹⁸⁾。

(3) ブルデュー社会学の問題点——「変革理論と組織論の欠落」をめぐって

ブルデューは、独自の認識論と実践理論によって現代社会学を主導している一人になっているといえるけれども、彼の社会学には難点がないわけではない。国際的にはすでにかかなりのブルデュー論が報告されているので、ここで改めて同じ類の批判や批評を繰り返すことは差し控えたい⁽¹⁹⁾。その代わりに、本稿が取り上げた実践理論に関連する難点として、「変革理論と組織論の欠落」の問題をごく簡単に考えてみよう。

ブルデューの著作を眺めると、フランスの認識論と思想を別にすればマルクスとウェーバーの思想が社会理論、とりわけ実践理論の構築に多大な影響を及ぼしていることが分かる。ハビトゥスと実践的行為、位置 (position) と性向 (disposition) の弁証法、場 (champ) の力学、階級の存在状態と社会的条件づけなどの基本概念と視点の中に、マルクスとウェーバーの思想が色濃く反映されているように思われる。ただ、文化資本たる彼らの思想の受け継ぎ方と使い方にブルデューの独自性が現れており、プラスとマイナスの二重の効果を生み出している。プラス面に関しては、既述の通りダイナミックな認識論と実践理論が構築されているのに対し、重大なマイナス面として考えられることは、多くのブルデュー批判が指摘しているように、ハビトゥス論がともすればタルコット・パーソンズ流の規範主義的パーソナリティ論と行為論に傾きがちであり、そのために構造変動や社会変動を説明できない、スタティックな実践理論に反転してしまう恐れがあるのではないのかという点である。確かに『再生産』や『ディスタンクシオン』などの一連の著作を追跡してみると、一定の社会的位置空間 (階級空間) と生活様

式空間を前提にして場の力学、位置と性向の弁証法、ハビトゥスと実践的行為が論述されており、前提となる空間はダイナミックな力学や弁証法を通じて再生産されていく。前提となる空間枠の中で多様な差異やズレが頻繁に発生するものの、結局、空間の構造変動は起きない。そのような論述スタイルが、ブルデュー社会学の一つの典型的なパターンとなっているように見受けられる⁽²⁰⁾。

これは、論述のスタイル、あるいは語り方の問題なのだろうか。それとも、フランスにおける階級構造の再生産というテーマを、教育社会学＝文化社会的に研究するスタイルに伴う問題点なのだろうか。階級構造の再生産に関して再生産のメカニズムから説明しようとするならば、構造変動については語られないまま、再生産だけがクローズアップされてしまうかもしれない。それでは、構造変動について説明し、語るための視点と概念は、ブルデュー社会学にはないのだろうか。構造変動や社会変動は非常に大きなテーマになるので、ここでは一つの試論として私見を述べてみたい。

周知のように、マルクスの思想には唯物史観と経済学批判に基づく社会変動論がある。インタビューにおいてブルデューは、若い頃からマルクスの著書に親しみ、ほとんどの著書を読んだと語っているから、唯物史観とマルクス経済学を熟知していたと推測される⁽²¹⁾。それにもかかわらず、生産力と生産関係との矛盾を基盤とする、階級闘争と革命を媒介として資本主義体制は変動する、という類の語り方は、『再生産』や『ディスタンクシオン』などの一連の著作にはほとんど見当たらない。好意的に解釈すれば、マルクスの唯物史観と革命理論を知り尽くしていたブルデューは、現代フランスにおける階級構造の再生産の見えざる仕組みを暴き出すために、または、構造変動と革命を語ることを許さないほど、現代フランスの資本主義体制は強固なものであると認識したために、あえて構造変動と革命については語ろうとしなかった。言い換えると、科学的研究とイデオロギー的宣言とを峻別するエピステモロジーのためか、または、『ディスタンクシオン』で構築された現代フランスの社会的位置空間（階級空間）を、階級闘争と革命によって変革する客観的可能性は、皆無に近いと判断したためか、革命的な構造変革や社会変革についてはほとんど語られていない。マルクスにとって実践とは、階級闘争と革命を中核とする、イデオロギー的色彩の濃いラディカルな行動であるのに対し、ブルデューにとって実践とは、日々の職業活動から消費行動までの幅広い領域を含む、大半が没イデオロギー的であるような、日常的な慣習行動であり、もし構造をラディカルに変革する革命的実践がありうるとしても、多数の人々の限らない日常実践の積み重ねのはるか彼方にある。実践概念の焦点が微妙に日常的慣習行動にスライドしているのに対応して、資本概念に関しても、生産関係をベースとする労働過程の搾取を通じて価値増殖する運動体という規定が影を潜め、日常生活の多種多様な人間関係の中で出自と学習を通じて獲得され増大する所有物という側面が、焦点に据えられるようになる。マルクスの経済学批判的資本概念から、近代経済学的資本概念と市民の日常的資本観念を含んだ「受容しやすい資本概念」へと変容しているように見える。強固な現代社会における日常的な慣習行動の世界を、統計学的手法とライフヒストリー的手法を組み合わせて厳密に把握しようとするれば、実践概念も資本概念もマルクス理論に含まれ

る、イデオロギー色の濃い十九世紀的概念では不適切なのだろうか。認識論的切断と対象の科学的構成を通過すると、イデオロギーと融合している変革理論は科学的認識の枠組みから排除されてしまうようである。

ブルデューの著作には、マルクス以上に、バシュラールに劣らずウェーバーの名前がしばしば登場する⁽²²⁾。ハビトゥスと実践の枠組みは、主にフランスのエピステモロジーと構造主義の視点からウェーバーのエートスと行為の枠組みを組み換えて、構築されたものとみなすこともできる。身体、時間、学習、構造といった視点がエートス論と行為論に組み込まれ、社会と身体の側面からダイナミックにエートスと行為の概念を再構成し、ハビトゥスと実践の概念に練り上げられたために、社会的構築物の継承＝相続や身体技法の習得などの問題に関する分析と説明の枠組みがいっそう強化された。だが、その反面ではウェーバー社会学における変革理論と組織論は、余り継承されなかったように思われる。まず、カリスマを媒介とする文化変容と社会変革の理論は、ウェーバーの壮大な比較歴史社会学的研究を支える基本的枠組みの一つであり、現代でも豊かな研究成果を可能にする大切な知的遺産である。そのような遺産を、ブルデューはなぜか余り取り上げようともせず、有効に活用してこなかった。再生産の社会的に自覚されない強固な仕組みを解明しながら、再生産というテーマについて語るという研究戦略からすれば、カリスマ変革の理論は使い道がなかった、あるいは現代ではカリスマ変革の現実的可能性がほとんどないために取り上げる意味がなかったと判断されたためなのだろうか。『古代ユダヤ教』や『ヒンドゥー教と仏教』などにおいて記述されている、巨大な変革力を持つ倫理予言と模範予言は、もはや現代の先進社会では時代錯誤な代物であり、研究用具としても有効な力を発揮できないと評価されたのだろうか⁽²³⁾。ブルデューの研究の焦点は、預言者のような達人たちの非日常的な社会変革行動ではなく、強靱な体制内における多数の現代人の日常生活の慣習行動に置かれ、鋼鉄のように堅固な構造が再生産されていく様子が描き出されていく。皮肉なことに、二十世紀初めにウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の終わりで予言していた社会と人間の姿を、半世紀余り後にブルデューは現代のフランス社会とフランス人の中に見いだしたようである⁽²⁴⁾。そう考えると、カリスマ変革理論をあえて適用しないブルデューの研究戦略は、現代社会適合的なやり方かもしれない。ただし、行為の内面過程をダイナミックに描写するための優れた枠組みでもある行為の類型論と相互に補完し合う形で、ウェーバーのカリスマ変革理論は構築されているから、カリスマ変革理論を有効に活用しないとすると、ブルデューは、行為の内面過程をダイナミックに把握する道具を失うように思われる。この問題は、ハビトゥス概念に潜在している「内面構造の自動再生産メカニズム」という構造主義的の難点と関連するが、紙幅の都合上議論しないでおこう。

鋼鉄のような現代先進社会の構造を熟知していた故に、カリスマ変革理論を安易に持ち出さない現代社会適合的研究戦略は一応認めるとしても、ブルデューの実践理論ではウェーバーの精緻な組織論が有効に活用されていない点は、問題となるだろう。社会的空間、場、ゲームなどの概念は頻繁に登場するのに反し、個人個人の実践と場の力学とを接合する、あるいは性向と位置との弁証法の舞台ともなる、媒介的中間項ともいうべき集団や組織の仕組みは、実践理

論の体系的論述の対象とはなっていない。『ディスタクシオン』や『ホモ・アカデミクス』等の経験的研究では、現実の集団と組織の諸問題が関連する箇所では頻りに取り上げられているものの、『実践理論の概略』や『実践感覚』といった理論的著作では、集団と組織の項目は見当たらない。構造、ハビトゥス、実践、身体、信念、資本、時間、支配が章別に論述されているけれども、社会学の根本概念ともいえるべき集団と組織の章が設定されていないために、実践理論と集団論＝組織論とは接合されないままになっている。『構造と実践』や『ピエール・ブルデュー—超領域の人間学』等のインタビューと座談会を中心に編集された文献においても、場、市場、規則、戦略、ゲームに関する語りが繰り返されるにもかかわらず、集団や組織の構造とプロセスに関する理論的語りがなかなか現れない。いささか市場とゲームに関する語りが過剰の感があり、しかも構造主義＝関係主義の視点に反して個人を中心に語られており、現代の市場とゲームを支えている組織の構造とプロセスに関する語りが少ない。個人という存在に関しては、誰の目にも見えるし、市場やゲームの担い手としてリアリティが感じられるために語りやすいのに対し、組織に関しては、直接目に見えない内部のメカニズムに踏み込んで理解しないと語れないから、市場やゲームの担い手として言及しにくい。そういう点を考慮すると、組織内部のメカニズムにまで踏み込んだ語りが余り見られないブルデューの場合には、現代の資本主義社会と高度消費社会の表層に関心が集中しすぎているのではないかと疑われるかもしれない。ミクロな個人の日常的慣習行動と、マクロな社会的空間や場とを直接結合するスタイルは、全体主義社会ならばいざ知らず、多種多様な無数の中間集団（社会的ネットワークや組織を含め）が絶えず発生している現代の多元的社会では、研究戦略上からも適切なやり方ではない。せつかく、身体や学習や構造などの視点を導入してダイナミックな実践理論を構築したにもかかわらず、ウェーバーの「行為—社会関係—団体の枠組み」を理論的に発展させていないために、個人と場との弁証法、ないしは個人と社会的空間との弁証法は、中間項である、集団や組織の媒介的ダイナミズムを欠いた抽象的な姿になってしまっている。そのことが、まわり回って変革理論の欠落をもたらしているように考えられる。前節で指摘したように、建設的な実践共同体論が欠けている点も、集団論や組織論が有効に活用されていない、または実践理論の体系に適切に組み込まれていない問題点と関連するといえるだろう。

ブルデューが、自己自身の立場を関係主義的思考と発生的構造主義であると宣言したかぎり、ミクロな個人の実践とマクロな社会構造とを接合する中間集団の構造とプロセスを理論的に解明するためにもっと多くのエネルギーを傾けるべきであった。身体、学習、構造の視点と概念を行為論の中に導入して活性化を図った点では、ブルデューの実践理論はウェーバーの行為論から大きく前進したといえるのに反し、組織論との接合を「怠った」点では一歩後退のように見える。組織論の分野では、伝統的な管理論的アプローチ、コンティンジェンシー・アプローチ、コンフィギュレーション・アプローチへと、社会の動きに対応する形で理論展開している。実践理論が行為論の現代的展開を担っていると自負するならば、現代社会研究に欠かせない組織論の現代的展開をも組み込んでいかなければならない。

おわりに

近年、社会学の理論的研究も随分と多様化しているが、実践理論や状況論的アプローチのような理論的スタイルは何かしら共通の傾向のように見受けられる。そのようなスタイルを代表するピエール・ブルデューの社会学は、必ずしもベストの理論とはいえないけれども、豊かな可能性を秘めた視点と概念を含んでいる。学際的な技能論、熟達化研究、実践共同体論、ミンツバーグの組織論、ウェーバーの組織論とカリスマ変革理論などを適切な形で活用することによってブルデュー社会学のパワーアップが期待できるものと考えられる。

[追記] 本稿は、京都大学大学院文学研究科における内地研修（1998年10月1日～1999年9月30日、指導教授宝月誠教授）の研究成果である。

注

- (1) ミンツバーグの「コンフィギュレーションに関する力と形の統合三角形」の図式は、『人間感覚のマネジメント』でも繰り返し使用されている。この図式自体をテーマにした論文には次のものがある。Mintzberg, H. 1991. The Effective Organization: Forces and Forms, Sloan Management Review, Vol. 32, No. 2, pp. 54-67
- (2) 小池の学説に対する多くの批判は、知的熟練論が依拠する「長期雇用と年功型賃金」の雇用制度では現代の社会経済変動には対応できないということに向けられている。小池は、高度な熟練を安定的に養成するシステムの必要性を力説しており、能力主義と競争を否定しているわけではない。
- (3) 熟達の合理性に関しては、次の3つのポイントを指摘できる。直観的に思い浮かんだ選択肢の比較と修正、視点の見直しと全体的戦略の理解、直観的判断力とコツの養成。ドレイファス『純粋人工知能批判』66～71ページを参照のこと。
- (4) 手際のよい熟達者と適応的熟達者に関して、次の論文を参照のこと。大浦容子「熟達化」（『認知心理学5 学習と発達』東京大学出版会、1996年、14～30ページ）
- (5) 「遂行と自己状態に関する適切な評価基準」の獲得、あるいは能動的モニタリングをともなった学習は、パシユラールの適合理主義とブルデューの「社会学の社会学」（反省的社会学）の趣旨に対応する。
- (6) 筆者は、内地研修中に神奈川県相模原市にある職業能力開発大学校（平成11年4月から職業能力開発総合大学校に改称された）に行き、多種多様な職業技能についての調査研究資料を閲覧したが、芸能や武道の身体技法論とは異なり目立たないけれども、地道な貴重な調査報告書が数多くある。参考までに長くなるが、森和夫の能力論的アプローチによる技能習熟の定義を引用しておく。「本研究の視点は技能習熟過程を能力構造化過程として捉え、その検討を行うことにある。……………（本研究の）能力論的アプローチから検討すると、知的管理系技能（例えば表計算ソフトウェア操作技能者や工業デザイン技能者の技能など）と運動感覚系技能（例えば機械加工技能者の技能など）とを問わず、生産技能の習熟過程には一定の傾向が見いだされた。第1は同一の技能において恒常的に抽出される能力因子の存在である。第2は基幹因子と専門因子の抽出である。第3は習熟に伴って因子が分化や統合を繰り返して構造を変化させていくことである。第4に習熟が終了期になると生産管理的能力をコアにした因子が抽出されることである。これらの検証を基に技能習熟過程を能力論的立場から記述すると、技能習熟とは能力因子の発生・消滅・分化・統合と再構造化の過程と捉えることができる。」（森和夫『技能習熟における能力の構造化過程』200ページ）多変量解析と因子分析などの手法を用いて、用意周到に技能ごとに多様な因子を抽出しているが、一例として機械加工の訓練学生の技能から

は生産管理因子、機械技術理論因子、知的判断・運動因子、仕上げ技能因子、作業方法因子、製品加工技能因子、手腕運動の速さ因子などが抽出され、訓練が進むにつれて機械加工技能全体における各因子の位置づけが変化していく。構造という視点からは生産管理因子が最も上位の因子であり、訓練初期には他の因子の中に「潜在化している」のに反し、訓練終了期には技能全体に対する寄与率が最大化して、文字通り生産管理因子が他の6つの因子を統合＝構造化する役割を果たしている。

- (7) 実践共同体 (community of practice) の参考資料と情報は、ある程度インターネットにより入手＝印刷可能である。例えば、Wenger, E. 1998. *Communities of Practice: Learning as a Social System* (A5 版用紙11ページ程の論文)、Community of Practice のホームページに掲載されていた「組織における革新と実践共同体の働き」をテーマにした資料 (6 ページ程の英文) 等からは最新の貴重な情報が得られた。
- (8) 正統的周辺参加論の問題点に関しては、倉島哲「身体技法の認識論のために—ハビトゥス・わざ・暗黙知—」が貴重な議論を展開している。ミンツバーグ等の組織論を有効に活用して実践共同体の内実を詳細に再検討すれば、正統的周辺参加論の効用と限界がさらにはっきりするかもしれない。
- (9) ミンツバーグは、組織論のアプローチを次のように分けて検討している。マネジメントの「唯一最善の方法」という伝統的立場、コンティンジェンシー・アプローチ、コンフィギュレーション・アプローチ。さらに、彼はコンフィギュレーションを越えて「矛盾—創造仮説」に基づくアプローチを模索しているように推測される。
- (10) 1990年代になってからブルデューの著作は、かなり日本語にも翻訳されるようになったとはいえ、底本を初版、2版、3版などのいずれにするかによって文章や論文の追加削除に違いがあるために、本稿では翻訳がある場合でも、入手したいくつかのフランス語版と英語版を参考にした。
- (11) 主な参考文献を参照のこと。仮に「主体性の哲学」(方法論上の主観主義—個人主義)と「概念の哲学」(客観主義—集合主義)に分けるとすれば、フランスのエピステモロジーは後者の伝統を強固に受け継いできた。
- (12) ブルデュー『実践感覚1』83～84ページ
- (13) 同上 87ページ
- (14) ブルデュー、シャンボルドン、パスロン『社会学者のメチエ』478～479ページ
- (15) 同上 483ページ
- (16) 同上 149～154ページ
- (17) バシュラール『適応合理主義』第三章、ならびに金森修『現代思想の冒険者たち05バシュラール』を参照のこと。
- (18) バシュラールは『適応合理主義』「第四章自己の知的監視」において次のように述べている。「自己の監視という機能は科学的文化の発展のなかで、合理性に基づく心的活動をわれわれに示すのに相応しい様々な混合形態を取る。…… 自己監視が十分な保証を得るためには、それ自らが何らかの形で監視されていなければならない(ここで「監視の監視」が現れる)。…… では「監視の監視の監視」(監視の三乗)が現れるのはどのような状況においてだろうか?それは明らかに、われわれが方法の適用を監視するだけでなく方法自体を監視するようになった時である。」(『適応合理主義』127～130ページ)このように、科学者は一連の認識論的行為の過程において認識論的障害の自覚、切断、対象の構成、事実の確認を多様な形態で「監視する」ことになる。しかも、ひとりひとりの科学者が個人的にだけでなく、複数の科学者が間主観的に、あるいは共同体的に「監視」を展開させなければならない。
- (19) 国際的なブルデュー研究の動向を知るための資料としては、次の文献が参考になる。Bourdieu, Pierre and Loic J. D. Wacquant, 1992. *An Invitation to Reflexive Sociology*, The University of Chicago Press., Shusterman, Ricahrd (edis.), 1999. *Bourdieu: A Critical Rearder*, Black-

well Publishers.

- (20) ハビトゥス概念の「構造主義的欠陥」に関する論述は、倉島哲「身体技法の認識論のために－ハビトゥス・わざ・暗黙知－」を参照のこと。
- (21) ブルデュー（石崎晴巳訳）『構造と実践』16ページ。マルクスの労働と資本の概念に関する考察は、拙稿「マルクスの労働論」（『香川大学一般教育研究』第27号、1985年）を参照のこと。
- (22) 1968年の『社会学者のメチエ』から1994年の『Raison Pratique: Sur la théorie de l'action』まで、人名索引におけるウェーバーの数はバシユラルやデュルケームと並んで多い。
- (23) マックス・ウェーバー（内田芳明訳）『古代ユダヤ教 I II』、ならびに拙稿「世界構成の弁証法としてのカリスマ化－カリスマ論の再検討－」、「M. ウェーバーの宗教社会学的枠組に関する考察（その1）」（香川大学教育学部研究報告第61号、1983年）、「同（その2）」（同、1984年）を参照のこと。
- (24) マックス・ウェーバー（大塚久雄訳）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』267～268ページ

主な参考文献

- ・ヘンリー・ミンツバーグ（北野利信訳）『人間感覚のマネジメント』（ダイヤモンド社、1991年）
- ・ヘンリー・ミンツバーグ（奥村哲史・須貝栄訳）『マネジャーの仕事』（白桃書房、1993年）
- ・Mintzberg, H. 1983. Structure in Fives: Designing Effective Organizations, Prentice Hall.
- ・Mintzberg, H. 1991. The Effective Organization: Forces and Forms, Sloan Management Review, Winter, 54-67.
- ・Mintzberg, H. and J. B. Quinn, 1996. The Strategy Process, Prentice Hall.
- ・小池和男編『現代の人材形成』（ミネルヴァ書房、1986年）
- ・小池和男『仕事の経済学』（東洋経済新報社、1993年）
- ・小池和男『日本企業の人材形成』（中公新書、1997年）
- ・宮本光晴『企業と組織の経済学』（新世社、1991年）
- ・ヒューバート・L・ドレイファス他（棕田直子訳）『純粋人工知能批判』（アスキー出版局、1987年）
- ・Ericsson, K. A. and J. Smith, 1991. Toward a General Theory of Expertise, Cambridge U. P.
- ・波多野誼余夫編『認知心理学5 学習と発達』（東京大学出版会、1996年）
- ・高野陽太郎編『認知心理学2 記憶』（東京大学出版会、1995年）
- ・ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー（佐伯 訳）『状況に埋め込まれた学習－正統的周辺参加－』（産業図書、平成5年）
- ・Chaiklin, S. and J. Lave, 1995. Understanding Practice: Perspective on Activity and Context, Cambridge U. P.
- ・Wenger, Etienne, 1998. Communities of Practice: Learnig, Meaning, and Identity, Cambridge U. P.
- ・『特集＝教育に何ができるか－状況論的アプローチ』（『現代思想』Vol. 19-6、青土社、1991年6月）
- ・生田久美子『「わざ」から知る』（東京大学出版会、1987年）
- ・野村幸正『知の体得－認知科学への提言』（福村出版、1989年）
- ・森和夫『技能習熟における能力の構造化過程』（職業能力開発大学校指導学科、1995年）
- ・福山弘『誰も書かなかった量産工場の技能論－技能を知らずして技術を語るな！－』（日本プラントメンテナンス安全協会、1998年）
- ・倉島哲「身体技法の認識論のために－ハビトゥス・わざ・暗黙知－」（国立民族学博物館共同研究『実践コミュニティの再検討』報告、1999年）
- ・ピエール・ブルデュー、ジャンクロード・パスロン（石井洋二郎監訳）『遺産相続者たち』（藤原書店、1997年）

- ・ピエール・ブルデュー、ジャンクロード・シャンボルドン、ジャンクロード・パスロン（田原音和・水島和則訳）『社会学者のメチエ』（藤原書店、1994年）
- ・Bourdieu, P., J.-C. Chambordon, J.-C. Passeron, 1983. *Le métier de sociologue: Préalables épistémologique*, Mouton Editor.
- ・Bourdieu, P., J.-C. Chambordon, J.-C. Passeron (Edited by Beate Kraus) 1991. *The Craft of Sociology: Epistemological Preliminaries*, Walter de Gruyter.
- ・Bourdieu, Pierre, 1977. *Outline of a Theory of Practice*, Cambridge U. P.
- ・ピエール・ブルデュー（今村仁・港道隆訳）『実践感覚1、2』（みすず書房、1988年）
- ・Bourdieu, Pierre, 1990. *The Logic of Practice*, Polity Press.
- ・ピエール・ブルデュー（石崎晴巳・東松秀雄訳）『ホモ・アカデミクス』（藤原書店、1997年）
- ・Bourdieu, Pierre, 1990. In *Other Words: Essays Towards a Reflexive Sociology*, Polity Press.
- ・ピエール・ブルデュー（加藤晴久編）『ピエール・ブルデュー—超領域の人間学』（藤原書店、1990年）
- ・ピエール・ブルデュー（田原音和監訳）『社会学の社会学』（藤原書店、1991年）
- ・ピエール・ブルデュー（石崎晴巳訳）『構造と実践』（藤原書店、1991年）
- ・Bourdieu, Pierre, 1994. *Raison Pratique: Sur la théorie de l'action*, Seuil.
- ・Bourdieu, Pierre avec Loïc J. D. Wacquant, 1992. *Réponse: Pour une anthropologie réflexive*, Seuil.
- ・Bourdieu, Pierre and Loïc J. D. Wacquant, 1992. *An Invitation to Reflexive Sociology*, The University of Chicago Press.
- ・Shusterman, Ricahrd (edis.), 1999. *Bourdieu: A Critical Rearder*, Blackwell Publishers.
- ・安田尚『ブルデュー社会学を読む：社会的行為のリアリティと主体性の復権』（青木書店、1998年）
- ・P. ブルデュー社会学研究会『象徴的支配の社会学』（恒星社厚生閣、1999年）
- ・中久郎編『社会学論集持続と変容』（ナカニシヤ出版、1999年）
- ・ミッシェル・ド・セルトー（山田登世子訳）『日常実践のポイエティック』（国文社、1987年）
- ・ガストン・バシュラール（金森修訳）『適応合理主義』（国文社、1989年）
- ・金森修『現代思想の冒険者たち第5巻バシュラール：科学と詩』（講談社、1996年）
- ・金森修『フランス科学認識論の系譜—カンギレム、ダゴニエ、ファーコー』（劉草書房、1994年）
- ・ガリー・ガッティング（成定薫他訳）『理性の考古学—ファーコーと科学思想史—』（産業図書、平成4年）
- ・マックス・ウェーバー（内田芳明訳）『古代ユダヤ教Ⅱ』（みすず書房、1964年）
- ・マックス・ウェーバー（大塚久雄訳）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波書店、1988年）
- ・拙稿「世界構成の弁証法としてのカリスマ化—カリスマ論の再検討—」（『ソシオロジ』第26巻第2号、1981年）

（原稿受理1999年9月20日）